

心酔せず、自から進んで同化することを他の諸朝のやうに努めなかつた蒙古族の朝廷即ち元代には、大都に移つて漢土の全域を直接支配の下に置いた天子にも、またその宰相にも、漢文を読むことすらも出来なかつたものが少からずあつた程に、漢文化は彼等に對して所謂同化力を發揮せず、却つて漢族にして自からその高い文化の誇を捨てて蒙古化するものも少くなかつたことを考へ合すならば、この見解の誤らないことを認め得るであらう。蒙古族はその大活動の間に、廣く東西諸種の文化に接し、他の東方諸民族のやうに獨り支那文化のみ高いものとし、これを模倣し、これに同化することを理想としなかつたと共に、武力至上主義を堅持して、自からの民族性を大體に於て維持したのである。もし漢族に特に同化力なるものが強盛であるならば、かゝる蒙古時代の如きに於てこそその特種的作用を發揮すべき筈である。所詮この作用は漢族の發揮したものでなくして、却つて同化せられた民族の自から進んで營んだものに外ならぬと認めなければならぬ。

さて漢文化の基を開いた所謂漢族は、悠遠の時代から多種多様の異族と接觸し、その國內にこれ等多くの異族を包含したことは更めていふまでもないことで、周が殷を討つて國を建てるに當つても、かの泰誓や牧誓などに於て認められるやうに、その下に友邦の冢君、西土の有衆、乃至庸蜀羌髳微盧彭濮等如何に多くの異民族が從屬し、その力に依つて革命を成就したかを知り得られる。然も周代の文化そのものが、その以前から漢族の間に發達し來つた文化を繼承し發展せしめたものに外ならぬことは、何人も疑はないところである。漢末魏初以來、西北地方の人口稀少であつたのに加へて邊禁が弛んだので、外族のこれに乗じて内地に侵入するものが甚だ多かつた上に、晉の